

# 最新のメッキラインで、 能力を発揮

—山水エレクトロニクス株式会社—

職場  
ルポ



EMPLOYEE REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



山水エレクトロニクス株式会社

〒547-0001 大阪市平野区加美北7-7-7  
TEL 06-4303-8881 FAX 06-4303-8882  
URL <http://www.sansui-elc.co.jp>

## 高度なメッキ技術が誇り

大阪市の東南、工場地域の一角に、高度なメッキ技術を誇る「山水エレクトロニクス株式会社」がある。社長の清水一三さんは、メッキ工場に勤めていた経験をいかして独立。進越化学工業を一九六八年に設立して、オーディオやテレビのチャンネルなどのツマミの樹脂メッキを行っていた。

その後、一九八一年にサンスイ株式会社を設立、三年後に現社名に変更し、以来、プリント基板の銅メッキを専業としている。樹脂の両面に銅箔を張り合わせたプリント基板には、極小の穴がたくさん空いている。その穴にメッキするには、一ミクロン単位の高度な技術が必要とされる。

「穴が大きければ、製品は大きくなり、小さくすれば、部品も製品も小さくなりますから、穴径はコンパクトになっています。穴にメッキをすることをスルーホールメッキと言いますが、この技術がむずかしく、製品を小さくするのに必要な非常にシビアな仕事です。私どもが関わる分野でのスルーホールメッキの技術に関しては、日本でもすぐれていると思っています。製品は、いろいろな分野の配線板として使われています」

山水エレクトロニクスは銅メッキ工程

を担当し、別の企業で基板製造などの工程を行い、携帯電話や車のインパネ、ゲーム機などの部品になっている。

## ふれあいを大事に、見本を示して教える

従業員は、派遣やパート、アルバイト、研修生の人たちも含めて約一五〇人。その中で知的障害者一六人と、身体障害者一人が働いている。障害者の雇用は、進越化学工業時代に始まった。

「私の長女がダウン症で、障害のある友だちやお母さんとの知り合いが増え、養護学校を卒業するころになると働かせてほしいと頼まれたことがきっかけになりました。当時は樹脂メッキをしていましたが、長女にはむずかしかったのです

が、作業ができる子がいましたし、合った仕事もたくさんあると思いました」  
一九七八年から、年に二、三人ずつ採用していった。

「初めは、時間をかけて教えていかなければならないのでたいへんでした。娘の同級生のお母さんもいっしょに働いてもらいましたが、慣れてくると力を発揮しますし、単純作業を一生懸命やりますので、戦力になります。会社の皆もだんだん理解をしてくれるようになりました」

異工場の工場長、上田高弘さんが転職してきたときは、すでに「戦力」となる人たちが何人もいた。

「パツと見た感じでは、ふつうの人たちと変わらないですから、すごい違和感はなかったですね。実習、面接を通して

作業ができそうな人を採用してきて、今日では一六人になりました。ただ、昔の機械に慣れていると新しい機械に抵抗があり、機械が切り替わるときに教えるのがたいへんでした」

以前勤めていた会社にも知的障害者は働いていたが、直接教えることはなかった。

「まったく初めてではありませんでしたが、隣で教えるという経験はありません



清水一三社長

でした。いちばん大事なものはふれあいでしょうね。『ちゃんと仕事をしているか』と、ポンと肩をたたいたり、朝は障害のあるなしに関係なく、必ず一人ずつ声をかけて、声が小さかったら、声が小さいよと話しかけています」

上田さんは、仕事は体で教えた。

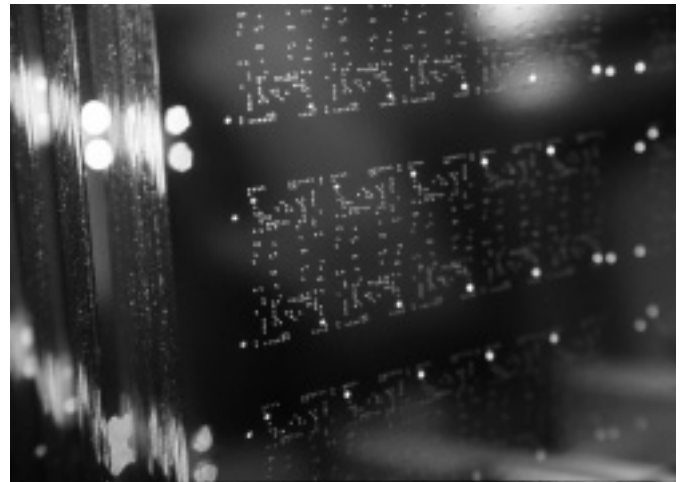
「肌と肌を触れるというか、手取り足取り、声をかけながら、『とるときは、こうしてとるんだよ』と体で見本を示しました。基板が二〇枚とかになると重さがありますので、持ち運びは女性より男性になります。勤務しているのは全員男性ですが、私たちがもっていない、いいものをもっていますから、一人ひとりの優れたところを見つけて、その人に合った職場に配置するようにしています」

社長の清水さんは、その様子を見守ってきた。

「仕事ができるようになるまで苦労したと思いますが、それだけの気持ちをもってくれたのは大きいと思います。根気よく、よくやってくれています」

## 連絡帳をやりとり。 家庭の理解が必要

地元の生野養護学校から高等部二年生で一週間、三年生で二週間の職場実習を受け入れている。業務課主任の佐藤美代さんが、障害者雇用を担当している。



(上) 極小の穴の開いたプリント基板。この穴にメッキする  
(下) スルーホールメッキされ、出荷される

「うちの作業ができる人ならいいですよとお話していますが、実習をしますと、親御さんから雇ってほしいという話が出ます。入社後は、本人もお母さんもよく相談にきますね。自閉症の人は、仕事はすぐくきつちりするのですが、ストレスがたまると、ある日突然感情が抑えられなくて、騒いだりします。そのときは、できるだけお母さんにお話をするようにしています。対応はふつうの人たちと一緒にです」

連絡帳をつくり、一週間に一度、その週の印象に残ることを綴ってもらっています。

「最初は毎日書かせていましたが、本人たちもめんどうになって書けなくなるので、週一回、自分がいちばん勉強したこと、いちばん失敗したことを書きなさいというふうに変えました。いやなこと、よかったことなど、そのときの気持ちを書きなさいと言っています。同じことを書いたりしますが、失敗して怒られた、今度はしっかりするとか書いていますね。こちら側のアドバイスを書いたり、ご家族に見てもらったりしています」

工場長は、連絡帳に必ず目を通す。

「二日の流れの中で何もないと何も書いていませんが、刺激があったことは書

いています。本人と話をしますが、お母さんとも話すようにしています。お母さんの協力は重要ですから、『会社としてはこうしてほしい』などの考え方を伝えていきます」

知的障害者の職場定着には家庭の理解、協力は不可欠だが、会社でのわが子の状態を知らない親もいる。佐藤さんは、協力的な家庭とそうでない家庭があると実感している。

「将来、子どもを自立させなければいけないと考えているお母さんは理解があり、こちらが注意しても、この子のためにも思ってくれます。会社に預けておけ

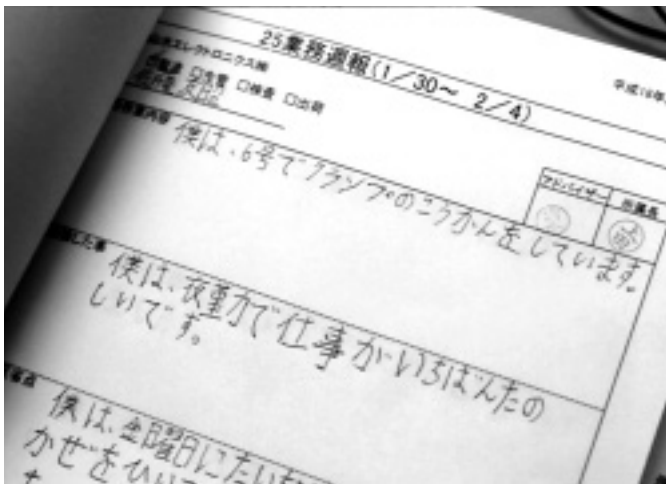


上田高弘 工場長と佐藤美代 業務課主任（写真提供）

ばいいという感覚のお母さんは、怒ると会社が悪いみたいに言われます。親御さんの指導も、学校でしていただければと思いますね」

親の立場でもある社長の言葉には、説得力がある。

「両親の理解が大事です。本人はものすごく素直ですが、知恵も働きます。お母さんにしかられると思えば、たまにうそもつきます。たとえば傘の骨を自分で折ったのに、会社の誰かのせいにしてたりします。そうすると、お母さんが会社に怒ってくる。辞めていった人たちは、お母さんと会社がうまくいかなかったとい



本人、会社、家庭との橋渡しとなる連絡帳

うケースが多いですね」

障害者就労・生活支援センターや親のサポートで、アパートで独り暮らしをする人が三人いる。趣味はいろいろ。アイドルの本をいつも抱えている人、音楽が好きで、カセットテープをたくさん持つてくる人、食べるのが大好きな人……、友だち同士で、カラオケにも飲みにも行く。

## 自動化された工場。 二カ月交代で夜勤

本社・工場の近くに、異工場と平野工場がある。三工場とも仕事は同じで、知的障害者の職種は製造のメッキ補助。本社に六人、異に六人、平野に五人が働く。自動化された機械は二四時間動いているので、勤務は昼の勤務と夜の勤務がある。日勤は八時から一七時まで、夜勤は二〇時から朝五時まで。その間は短時間のつなぎの人が入るが、残業のある日もある。日勤と夜勤は二カ月ごとに交代する。工場長の上田さんは、その点を面接時に説明して了解をとる。

「夜勤があることを本人と家族によく話しています。本人たちには、友だちと遊びたいとき、飲みたいときもあるだろうから、たまには朝まで遊んでもかまわない。ただし、仕事と遊びは違うから、八時から五時まではきっちり働きなさい

と話しします。夜勤は、仕事中に眠くなることもあり。本当に眠ると危ないの  
で、夜勤の責任者に『この子はよく眠く  
なるから気をつけて』とか頼んでいます」  
夜遊びして翌日休んだ人はいない。夜  
勤を忘れて遊びに行ってしまった人もい  
ない。「ぼくは、夜勤で仕事をするのが  
いちばん楽しいです」と連絡帳に書く人  
もいる。

待遇は正社員で、最賃除外申請は行っ  
ていないが、社長は経営的に十分成り立  
っていると考えている。

「障害のない人たちが嫌がることをま  
じめに一生懸命にしてくれ。健康者  
とほとんど変わらずに仕事ができる人が  
二人います。一般の人たちは休んだり遅  
刻したりしますが、時間どおりに出勤し  
て、休まないし、まじめです。一カ所の  
作業なら、十分やってくれていますね」

三工場の中の異工場へ。現場では、プ  
リント配線基板を機械にかける作業と外  
す作業、メッキの前処理工程に入れる作  
業と出す作業、運ぶ作業のほかは、全部  
自動化されている。職場実習も、就職し  
たときと同じ作業をする。というより、  
最新鋭のラインでは、人間がする作業は  
それしかないのだ。

「コストのわからない機械に入れ替え  
ていかないと勝ち残っていきませんの  
で、社長がいちばん新しいラインを導入  
しました。同じラインに昔は七人いまし

たが、いまは一人です。人間の手で行う  
のは、かけて外す、運ぶという作業だけ  
です。知的障害者に向いている職場だと  
思いますが、ラインがトラブルを起こし  
たときの対応が必要ですから、全員を知  
的障害者にすることはできませんね」  
河本侑治さんは、入社して三年。すべ  
ての仕事がこなせ、異工場でなくてはな  
らぬ存在だ。

「最初はむずかしかったのですが、仕事  
は慣れました。まだまだ自信はありませ  
んが、このまま仕事を続けていきたいで  
す」

## きれいな工場ほど、 品質も上がる

経営陣、現場の責任者、一緒に働く人  
たちの理解があるかどうかで、障害者の  
定着は違ってくる。自閉症の人が仕事  
中に抜け出すこともあるなど、たいへんな  
ことは日々いろいろあっただろう。三人  
に、障害者を雇用してうれしかったこと  
を聞いた。

上田さん。「工場にこられるお客様に  
は、私からは何も言いませんが、何回か  
こられるとうすうす感じてこられるよう  
です。『この人がそうなのですか?』と  
聞かれて、『全然わからない。きちんと  
仕事をしてくれればいいですよ』と言わ  
れるのが、うれしいですね。仕事を確実



自動化された異工場

に一つ一つ覚えて、本人の力になってい  
くのを見ているのもうれしいことです」  
佐藤さん。「夜勤明けの帰りに、ほか  
の工場から会いにきてくれます。よそで  
は動まらないからとうちにきて、最初は  
会話ができなかった人が、何年か経つう  
ちに成長して自分からも話すようになって  
います。現場の人たちとしゃべることが  
がいいのではないかと思います。養護  
学校の先生もびっくりされます。そうい  
う成長を見るのはうれしいですね」  
社長の清水さん。「いいところはたく

# WORKSHOP REPORT



メッキする基板をラインにかける作業を担当する  
和田邦雄さん



(上) 基板の水洗い、乾燥機に製品を入れる鈴木則克さん  
(下) メッキされる基板の前処理作業をする河本侑治さん



鈴木さんたち働く障害者と話す佐藤主任

さんあります。三年ぐらい、ものを言わない子が見違えるように明るくなったりすると、障害者を雇用してよかったと思います」

工場内は明るく、とてもきれいで、メッキ工場は雑然としている……というイメージが一新された。「三Kのイメージはもうないですよ」と上田さん。

「すごくシビアな仕事で、不良が出たら、お客さんのところへ行くトリコールになってしまいます。きれいな工場であればあるほど、品質も上がるという職場に変わってきています。ここだったらいいものができる、安心してうちの商品を頼めるという工場づくりをしないと、仕事はいただけません」

事業は順調に発展してきた。清水社長は近隣企業と協力して、また新たな事業に挑戦しようとしている。

「東大阪の中小企業が集まって、五〇ナノ金属粒子を扱う、高度な技術の会社を立ち上げようとしています。いまの電子部品に使う金属粒子の百分の一ほどの大きさで、電子部品の機能が向上します。メッキを応用していますので、うちの仕事とかけ離れたものではありません。三年後には三〇億円の売り上げをめざしています……」

大阪の中小製造業の底力はすごいと聞く。知的障害の人たちが安心して働ける職場は、ここにも健在だ。